

第5学年家庭科における「意味と内容」のひろがり

5年A組 藤原 ゆうこ

—— 題材『わが家のふれ合いづくり』の学習をとおして ——

1. 子どもに対するねがいと学習指導のねらい

① 題材設定の理由

本題材は、子どもが日常生活を過ごしている家庭のもつはたらきをみつめなおし、生活の快適性を考えながら、身の回りをよりよく整えようと自分なりの工夫をこらしながら自分の生活にはたらきかけていこうとする子どもの姿をねらいとして設定した。本題材を通して家族や仲間と自分との関わりを意識させたいと考えた。そこから、当たり前のように流れている日常生活が、自分が考え、取り組んだことによって、より快適な生活へとつながること、それが家族間や仲間とのふれあいの深まりとなることを実感させたいと考えたからである。

5年生の子どもたちにとって、生活の場の大半は家庭と学校である。家庭は一人一人の子どもにとって、異なるところがあるものであり、家庭によって価値観も様々である。一方、学校は子どもたちにとって共同で生活を行う共通の場であるといえる。

住まいの中に取り入れられている工夫については、学校と同様に、まず共通の学習対象から考えさせたいと考え、住宅展示場の見学を計画した。そこから、住まいに関心を持って自分の家庭生活を振り返り、自分（自分たち）の生活の快適性に必要だと思われる課題を見つけていくこととした。様々な角度からよりよい生活について考え、それぞれに合った方法を見いだしながら、課題を追究していく子どもの姿に「意味と内容」がひろがる学習を展開したいと考えたからである。子どもが自らの家庭で実践する時間については、冬休みを利用することとし、次の3つを学習指導のねらいとし、題材目標を設定した。

◇住まいへ関心をもつ

住まいは、家族がいろいろな活動をしたりくつろいだりしながら、心と体を休め、明日への活力をたくわえる大切な場所である。毎日生活している身近なところでありながら、日頃何気なく過ごしていることが多い。子どもが、将来にわたって、よりよく生活をしていくために、まず子どもたちに住まいへの関心をもたせることが大切となる。

自らの生活に関心を持って、子どもたちが住まいに目を向けたとき、今まで意識したことのない住まいにみられる工夫やよさ、先人の知恵などに気付くこととなった。その工夫やよさが取り入れられている理由を考えていく中で、快適な生活とは、機能面における工夫やよさだけではなく、人とのふれあいの中で得られる楽しみや心のやすらぎが大切な要素であることに気付いていくことができた。自分の生活を見つめ直し、そこからうまれた課題を解決するために、子どもが主体的に活動し、よりよい住まい方を実感しながら、快適な生活の実践者となりうるための力を育むことをねらいとした。

◇身の回りの快適性を考える

この題材では、彼らの身近な社会である学校に目を向けさせ、自分たちの教室や学校施設の環境について考えさせていくこととした。例えば、学校生活の中で見過ごされがちな散らかったトイレのスリッパや、教室のゴミ、片づけ忘れた道具類などである。一方で、応援団や清掃など、日頃自分たちが行っていた活動が、学校全体の快適性に結びついていくことにも気づかせたいと考えた。学校施設や学級という身近な社会の中から問題を見つけることによって、学校の特徴やよさに気づき、それを生かして、よりよい学校、学級空間にしていくためにはどうしたらよいのかと真剣に考え、話し合う子どもたちとのまなざしを共有しながら話し合いを行う場を設定した。

◇家族とのふれ合いを大切にすることを育てる

「生活の快適さ」についての学習をすすめていく中で、子どもが「家庭生活の中の快適性」は、自分たちも創り出せるということに気付いてほしいと考えた。住まいに取り入れられている工夫や家族間のコミュニケーションの取り方は、家庭によって異なるものである。自分の部屋にいる時間が長くなったり、習いごとや塾、親の仕事などから、食事を家族でという機会も少なくなっている子どもが多くなりつつある。そんな中でもちょっとした心がけで家族とのふれあう時間がもてることに気づき、家族との時間の共有を大切にしながらそれぞれの家庭にあった実践へとつなげていく子どもの姿が、本題材で期待する子どもの姿であった。

② 題材目標

- ◎家族とのふれ合いや団らんを楽しくもてるような空間を、自分なりに考えたり工夫したりしながら家庭生活にはたらきかけていく。
- 住まい方に関心を持ち、身の回りを快適に整えようとする。
- 自分の住まい方を見直し、よりよくするために工夫をこらそうとしている。
- 身の回りを快適に整えるための自分なりの課題を見つけ、よりよい実践につなげることができる。
- 快適な住まい方に必要な要素がわかる。

2. 5年生の子どもがとらえた「意味と内容」

① この題材での「意味と内容」

学級の子どもたちは、自分の家族のことや家庭の様子を、楽しそうによく話す。自分の家庭が好きだったり心地よいと感じている子ばかりであると思われるが、自分が家族の一員として生活しているという意識をもっている子どもは少なく、受け身的だと思われる。

この題材での「意味」とは、「生活の快適性」について子どもが自分の生活を見つめなおしながら考えていくことであり、そのための学習課題が「内容」である。そして、「意味と内容」がひろがる場面とは、家族や仲間への思いをもちながら、自分なりのこだわりを持って「自分の周りの環境をよりよくしよう」と、考えたり対象にはたらきかけようと追究する子どもの姿がみられる場面であると考えた。

② 学習のながれ (全10時間)

第1次：住まいのはたらきを考えよう (2時間)

第1～2時 『住まい方を見つめなおしてみよう』～家庭・学校～

日頃何気なく過ごしていることが多い家での生活。見つめなおしてみると…

第2次：住まいの中に取り入れられている工夫を調べよう (4時間)

第3～4時 『住まいを調べ、住まいに取り入れられている工夫を見つけよう』

・住宅展示場にて、住まいのステキをさぐろう！

第5～6時 『住まいに取り入れられた工夫は何のため？』

・住む人が快適に過ごせるように→快適な空間ってどんな空間だろう？

共通の学習対象として行った住宅展示場へは、部屋ごとに取り入れられていると思われる工夫を予想し、見学を行った。子どもたちは、住まいに取り入れられている工夫について、便利さを求めた機能面だけではなく、そこで生活する人に合わせた快適さや安全性、バリアフリーが取り入れられているという“人へのやさしさ”や“環境へのやさしさ”も考慮されているということに気づき、理解することができた。

住宅展示場にはいろいろな家がいっぱいあって、どの家にもそれぞれの工夫がありました。例えば、キッチンでは上の棚が下へ降りてくるようになっていました。高くてとりにくいものを簡単に取り出せるのはとっても便利だし、ぼくのお母さんも背が低いから、こんなのがあったら助かるだろうなあ…略…

……略…… 始めにみた家の玄関には、扉が鳴るとチャイムが鳴る工夫があって、人が入ってきたらすぐにわかるようになっていました。和室には、心がなごむような雰囲気飾りがあって、畳の香りがしました。太陽の光が入りやすいように窓も大きくなっていました。お風呂には、滑らないような工夫が床にされていました。二つ目に見た家では、玄関にもお風呂場にも段差がなくて、車いすでも安心して通れるようになっていました。……略……どの家にも収納スペースがたくさんあって、使いやすく、使う人のことを考えて作られていて、こんな家にすみたいなあと思いました。

子どもたちからはそれぞれの考えが出され、納得できる意見、自分とは違い驚かされた意見、様々であった。たが、「快適だと思う空間」とは、“目的にあった便利さと、過ごす人が心地よいと感じてくつろげる”という点で共通するものがみられた。

第3次：身近な教室空間を見つめなおそう (2時間)

第7～8時 『自分たちの教室を快適空間にしよう』

・教室は何をする場所 → 快適な教室ってどんな教室だろう？

学校施設や学級という身近な社会の中から問題を見つけることによって、子どもたちは、教室、学校の快適性について考え、具体的な問題解決の方向へうごきだすこととなった。問題を解決しようとしていく過程において、全体を見ることができずに自分の思いを強く出してしまいうこともあったが、“自分たちの思いによって、教室環境がよくも悪くも変わるんだ”ということを実感できたようであった。

第4次：自分の家庭に生かせる工夫を考えよう (2時間)

第9時 『自分の家庭にふさわしい実践を計画し、冬休みを利用して実践してみよう』

第10時 『家庭での実践報告会をひらこう』

3. 「意味と内容」がひろがる場面

本題材の中で、着目児がひろげていった「意味と内容」を考察していきたい。

着目児◆は、家庭科の学習において関心・意欲が高いわけではなく、生活面において、“やってもらう”ことに慣れているようである。学習の中では、自分の中で生まれた問題をそのままにせず、解決しようとする姿勢が見え始めていた。

授業導入時の ◆児の感想 (一部略) 昔の人ってクーラーやヒーターがなかったから、かわいそうだなと思いました。ぼくは、広くてエレベーターや秘密基地のようなものがある家が快適でいいなと思います。

当初、学習計画にはなかったが、住宅展示場の見学を行う前に“身近な学校施設”の工夫調べを行うこととした。◆児がもっと自分の身近なところに向けたまなざしを共有していきたいと考えたからである。仲間が見つけ出してきた学校の中の様子に、驚きながら真剣に傾く姿がみられた。自分の住まいへの関心を持ち始めたようでもあった。

見学後の ◆児の感想 (一部略) 展示場にいたおじさんが、階段のはばをふつう 22 cm だけど、26 cm に広く設計して、階段から落ちないようにしていると教えてくれました。ぼくの家はお母さんが 2 回も階段から落ちたことがあるので、家の階段をはかってみると、23 cm でした。少しのことでちがってくるんだなと思いました。…… バリアフリーの話もしてくれました。お年寄りや体の不自由な人にも住みやすくなっているそうです。ぼくの家も、段差がなかったりと、バリアフリーになっていました。将来のこととかも考えて、住む人にやさしい家がいいなと思いました。

自分の生活を見つめながら考えよう、「意味と内容」をひろげようとする ◆児の姿が見られはじめている。自分の意見を自信を持って発言する場面が少ないこともあり、◆児の気づきや実践は、学級全体で紹介することとした。学校施設の工夫調べの際は仲間の気づきに驚いていた ◆児から、仲間に驚きを与える ◆児へと変容していくまなざしを共有できたことはうれしく感じた。整理整頓が苦手な ◆児であるが、冬休み中は、家中の大掃除を手伝うこと、暖房中の部屋の空気の入換えを行うこと、などを実践し、家族からも喜んでもらえたようであった。

4. 成果と課題

“「意味と内容」がひろがる学びの創造”のテーマのもと、工夫する楽しさに気付く子どもを育てる家庭科学習をめざして実践してきた。家庭科では、学習内容が子ども自身の生活と密着したものであるのこともあり、関心を持って「やってみよう」とする子どもの姿が見られることが多かった。本題材では、「やってみよう」という子どもす姿から「自分たちのはたらきかけが、生活をよくも悪くも変えることができるんだ」ということを実感できていたことが、大きな成果であったといえるのではないか。

今後は、子どもの実感から生まれた意識や実践への試みを、いかに日々の生活の中に生かしながら持続しようとしていけるのかが、課題となってくるだろうと考えている。